

《論文》

川端康成と『文藝春秋』の「五十年」

——交錯する新進作家と新興雑誌

古矢 篤史

要約

本稿は、一九二三年に創刊された『文藝春秋』と、この雑誌を通じて本格的な文学活動を開始した川端康成との、五〇年間にわたる相互的關係を考察する。一九二〇年代以降のメディア状況が文学を変容させたという方に捉えるのではなく、作家もまたその規範を取り込みながら新しい文学の形式をつくっていった過程を検証し、川端が『文藝春秋』との関わりの中で「掌篇小説」、総合雑誌における「文芸時評」、「芥川賞選評」を新しく形成したことを明らかにする。

1、はじめに

本稿の目的は、一九二三年に創刊された大正期の新興雑誌『文藝春秋』と、同年に作家としての来歴が実質的に開始した作家とを並べながら、通時的かつ双方向的に検証をすることを通じて、一九二〇年代以降の文学が単に雑誌という出版メディアと不可分であるだけでなく、両者が相互に新しいメディア状況を構築していった過程を明らかにすることにある。

本稿では特に、川端康成をとりあげる。すでに川端は、第六次「新思潮」（一九二二年創刊）に「招魂祭一景」（一九二二年四月）等を掲載、また『文章倶楽部』の投書や『新潮』『時事新報』への文芸批評執筆などの作家活動を始めていた。しかし、菊池寛にその才能を認められ、菊池が創刊した『文藝春秋』に参加したことが、川端の本格的な出発となったことは間違いない。川端の小説制作の起源を辿るうえで、『文藝春秋』との關係を問うことは重要な観点となる。また、川端の文芸批評の手腕を早くから評価し、戦後に文藝春秋新社の社長となる佐佐木茂索との關係もこの時期に始まっている。小説だけでなく、批評の領域についても『文藝春秋』との接点を探るべきであろう。

『文藝春秋』創刊から川端が一九七二年に亡くなるまで、両者の關係はおよそ五〇年間に及ぶ。この五〇年間で、単に複製技術時代の出版メディアが文学状況を変容させた一例として構造論的な史観で片付けるのではなく、作家もまた新たなメディア規範を自ら構想しながらテキストをつくっていた側面を有する期間として再整理する必要がある。何も作家はメディアの要請に応じていたばかりではなかったのであり、その両者の相互的關係を正確に捉えることが目標となる。¹

2、川端康成と『文藝春秋』の接点

創刊号に「林金花の憂鬱」を掲載し、翌第二号から編輯同人となつて以降、川端にとって『文藝春秋』は没するまで継続的に関わりのある雑誌であった。最後の掲載は「創刊五〇周年記念特別号」（一九七二年二月）に寄せたエッセー「夢 幻の如くなり」で、川端はその冒頭を次のように書き出している。

文藝春秋の五十年は、すなわち、私の文筆生活の五十年である。

(中略)

文藝春秋と同年のために、私は文士歴が数えやすい。²

『文藝春秋』創刊と自身の文筆生活の開始が重ねられているのが分かる。上述したようにそれ以前にも創作活動があったはずだが、「文壇」に登場したのは『文藝春秋』を通じてであると川端自身も認識しているであろう。このエッセーは、創刊前後の出来事を振り返りながら、次のように締めくくられている。

一九七二年の今年は、それからちょうど半世紀の五十年、「夢幻の如くなり」である。織田信長が歌い舞ったように、私も出陣の覚悟を新にしなければならぬ。³

末尾の「出陣の覚悟を新に」の意図は量りかねるが、文筆生活五〇年の節目に、これからの活動に対する意気込みは感じられる。目次のタイトル横に添えられた文言には「文壇生活五十年、心を引締めて新たな出発を」と書かれており、『文藝春秋』編集部もそのように捉えたことが確認できる。川端が逗子マリーナの仕事部屋でガス自殺を遂げたのは、この「夢幻の如くなり」掲載のわずか二ヶ月後、四月一六日のことであった。川端の文筆生活(文壇生活)の五〇年は、『文藝春秋』創刊五〇周年とともに幕を閉じたのである。

この五〇年のあいだに『文藝春秋』に掲載された川端の作品を図1のとおり整理した。計一四三回で、数だけを見れば多いと言えるが、実は、

No.	年	月	作品(小説は○印)	備考
1	1923(大正12)年	1月	○「林金花の憂鬱」	創刊号
2		2月	「新春新人創作評」	
3		4月	○「精霊祭」	
4		5月	○「会葬の名人」	
5		6月	「楡笥集と市井鬼」	
6		8月	「文芸春秋の作家」	
7		11月	○「日向」	9・10・12月は休刊。
8		11月	「大火見物」	
9	1924(大正13)年	3月	「月評家気焔」	
10		4月	「前月一幕物評」	
11		7月	「「呪はしき生存」を読む」	5月は休刊。
12		8月	○「生命保険」	
13		11月	「駒込雑筆」	
14	1925(大正14)年	12月	○「非常」	
15		3月	「湯ヶ島温泉」	
16		3月	「「祖父の妾」のお詫び」	
17		5月	「温泉通信」	
18		8月	○「十七歳の日記」	
19		9月	○「統十七歳の日記」	
20		11月	「初秋山間の空想」	
21		12月	○「第三短篇集」	「有難う」「萬歳」「胡頹子盗人」「玉台」
22	1926(大正15・昭和元)年	1月	「掌篇小説の流行」	
23		3月	「合評会その他」	
24		4月	○「第四短篇集」	「子の立場」「心中」「龍宮の乙姫」「処女の祈り」「冬近し」
25		7月	「一流の人物」	
26		8月	「文壇現状論」	
27		9月	○「大黒像と駕籠」	

図1 川端康成の『文藝春秋』掲載作品一覧

『国際研究』

28	1927(昭和2)年	5月	○「第五短篇集」	「馬美人」「百合の花」「赤い喪服」「処女作の祟り」
29		6月	「伊豆の印象」	
30	1928(昭和3)年	1月	「片岡・横光等の立場」	
31		5月	○「死者の書」	
32		7月	「夏」	
33		10月	「犬養健氏」	
34	1929(昭和4)年	1月	「昭和三年と四年」	(文芸時評)
35		2月	「新春創作界の外観」	(文芸時評)
36		4月	○「死体紹介人」	「死体紹介人」の一章。
37		4月	「文芸時評」	(文芸時評)
38		5月	「文芸時評」	(文芸時評)
39		7月	「文芸時評」	(文芸時評)
40		8月	○「顕微鏡怪談」	
41		8月	「文芸時評」	(文芸時評)
42		9月	「文芸時評」	(文芸時評)
43		10月	○「或る詩風」	
44		10月	「文芸時評」	(文芸時評)
45	1930(昭和5)年	1月	○「彼女等と道」	「温泉宿」の二章。
46		9月	「文壇散景」	
	1931(昭和6)年			この年、掲載なし。
47	1932(昭和7)年	1月	「菊池寛氏の家と文藝春秋社の十年間」	十周年記念号
48		4月	○「短篇集」	「顔」「化粧」「妹の着物」
49	1933(昭和8)年	4月	○「寝顔」	
50	1934(昭和9)年	2月	「明るい死顔」	
51		6月	○「夏」	「虹」の三章。
52	1935(昭和10)年	1月	○「夕景色の鏡」	「雪国」の一章。
53		6月	「「純粹小説論」の反響」	(文芸時評)
54		7月	「文芸時評」	(文芸時評)
55		8月	「文芸時評」	(文芸時評)
56		9月	「第一回芥川賞選評」	
57		10月	「文芸懇話会」	(文芸時評)
58		11月	「文芸時評」	(文芸時評)
59	12月	「文芸時評」	(文芸時評)	
60	1936(昭和11)年	1月	○「これを見し時」	
61		4月	「第二回芥川賞選評」	
62		9月	「第三回芥川賞選評」	
63		10月	○「火の枕」	「雪国」の六章。
64	1937(昭和12)年	3月	「第四回芥川賞選評」	
65		5月	「文壇俳句会 三月例会記」	
66		9月	「第五回芥川賞選評」	
67		11月	○「高原」	「高原」の一章。
68	1938(昭和13)年	3月	「第六回芥川賞選評」	
69		10月	○「百日堂先生」	
70	1939(昭和14)年	1月	「今日の小説」	(文芸時評)
71		2月	「文学の嘘について」	(文芸時評)
72		3月	「第八回芥川賞選評」	
73		4月	「徳田秋聲氏の「假装人物」」	(文芸時評)
74		5月	「小説と批評」	(文芸時評)
75		6月	「作家に就て」	(文芸時評)
76		9月	「第九回芥川賞選評」	
77	1940(昭和15)年	1月	○「旅人宿」	
78		3月	「第十回芥川賞選評」	
79		7月	○「日雀」	
80		9月	「第十一回芥川賞選評」	
81	1941(昭和16)年	1月	○「義眼」	
82		3月	「第十二回芥川賞選評」	
83		8月	○「天の河」	
84		9月	「第十三回芥川賞選評」	
85	1942(昭和17)年	3月	「第十四回芥川賞選評」	
86		9月	「第十五回芥川賞選評」	

図1 川端康成の『文藝春秋』掲載作品一覧

川端康成と『文藝春秋』の「五十年」——交錯する新進作家と新興雑誌

87	1943(昭和18)年	3月	「第十六回芥川賞選評」	
88		9月	「第十七回芥川賞選評」	
89	1944(昭和19)年	3月	「第十八回芥川賞選評」	
90		6月	「選者として」	戦記文学賞制定発表
91		7月	○「一草一花」	「十七歳」「わかめ」「小切」
92		9月	「第十九回芥川賞選評」	
93	1945(昭和20)年	3月	「第二十回芥川賞選評」	4~9月は休刊。
94	1946(昭和21)年	6月	○「過去」	この年3月、文藝春秋社解散、文藝春秋新社設立。
95		7月	○「過去」	「再会」の二章。
	1947(昭和22)年			この年、掲載なし。
	1948(昭和23)年			この年、掲載なし。
96	1949(昭和24)年	9月	「第二十一回芥川賞選評」	
97	1950(昭和25)年	4月	「第二十二回芥川賞選評」	
98		10月	「第二十三回芥川賞選評」	
99	1951(昭和26)年	4月	「第二十四回芥川賞選評」	
100		10月	「第二十五回芥川賞選評」	
101	1952(昭和27)年	3月	「第二十六回芥川賞選評」	
102		9月	「第二十七回芥川賞選評」	
103		10月	○「自然」	
104	1953(昭和28)年	3月	「第二十八回芥川賞選評」	
105		9月	「第二十九回芥川賞選評」	
106		11月	○「水月」	
107	1954(昭和29)年	3月	「第三十回芥川賞選評」	
108		9月	「第三十一回芥川賞選評」	
109	1955(昭和30)年	3月	「第三十二回芥川賞選評」	
110		5月	○「夢がつくつた小説」	
111		9月	「第三十三回芥川賞選評」	
112	1956(昭和31)年	3月	「第三十四回芥川賞選評」	
113		9月	「第三十五回芥川賞選評」	
114	1957(昭和32)年	3月	「第三十六回芥川賞選評」	
115		9月	「第三十七回芥川賞選評」	
116	1958(昭和33)年	1月	○「並木」	
117		3月	「第三十八回芥川賞選評」	
118		9月	「第三十九回芥川賞選評」	
119	1959(昭和34)年	3月	「第四十回芥川賞選評」	
120		9月	「第四十一回芥川賞選評」	
121	1960(昭和35)年	3月	「第四十二回芥川賞選評」	
122	1961(昭和36)年	3月	「第四十四回芥川賞選評」	
123		9月	「第四十五回芥川賞選評」	
124	1962(昭和37)年	9月	「第四十七回芥川賞選評」	
125	1963(昭和38)年	2月	○「人間のなか」	
126		3月	「第四十八回芥川賞選評」	
127		9月	「第四十九回芥川賞選評」	
	1964(昭和39)年			この年、掲載なし。
128	1965(昭和40)年	3月	「第五十二回芥川賞選評」	
129		9月	「第五十三回芥川賞選評」	
130	1966(昭和41)年	3月	「第五十四回芥川賞選評」	
131		9月	「第五十五回芥川賞選評」	
132	1967(昭和42)年	3月	「第五十六回芥川賞選評」	
133		9月	「第五十七回芥川賞選評」	
134	1968(昭和43)年	3月	「第五十八回芥川賞選評」	
135		6月	「文藝春秋」ゆかりの人たち	
136		9月	「選挙事務長奮戦の記」	
137		9月	「第五十九回芥川賞選評」	
138	1969(昭和44)年	3月	「第六十回芥川賞選評」	
139		9月	「第六十一回芥川賞選評」	
140	1970(昭和45)年	3月	「第六十二回芥川賞選評」	
141		9月	「第六十三回芥川賞選評」	
142	1971(昭和46)年	3月	「第六十四回芥川賞選評」	
143	1972(昭和47)年	2月	「夢 幻の如くなり」	創刊五〇周年記念特別号

図1 川端康成の『文藝春秋』掲載作品一覧

(『川端康成全集 第三十五巻』(新潮社、一九八三年二月)所収の「作品年表」をもとに著者作成)

五〇年という期間からすれば内容的にはむしろ乏しいものである。年別の掲載回数を示すと、図2のとおりになる。これらの表から、いくつか指摘できることがある。

第一に、創刊から一九二六年までは積極的に掲載している点。このおよそ四年間は、『文藝春秋』が一九二六年一月に総合雑誌に転じる頃までの期間にあたる。

第二に、総合雑誌化してからは全体的には掲載が減少していく一方で、一九二九年には最多の掲載数を記録し、また一九三五年と一九三九年にも多数の掲載に至っている点。結果として、後者の三ヶ年（一九二九、一九三五、一九三九年）の掲載回数だけが突出している、バランスを欠いた期間になっている。ここには総合雑誌ならではの問題点があると考えられ、川端の場合、総合雑誌としての『文藝春秋』では掲載が安定しなかった要因を探る必要がある。

第三に、一九三六年頃から二編は基本的に掲載され、年によって一編がプラスアルファで掲載されるという形式が、没年頃まで続くという点。基本の二編とは、具体的には、芥川龍之介賞（一九三五年制定）が毎年三月・九月に決定発表される際に掲載される「選評」である。言い換えれば、一九三六年以降の川端と『文藝春秋』の関係は芥川賞の選考にほとんど集約され、作家と雑誌の相関性は脆弱だったと言わざるを得ない。戦後は特にその傾向が顕著に見られる。創刊三十五、四十五、五十年周年の節目に座談会やエッセーを載せたりはするものの、創刊期から関わりの深い数少ない作家であり、菊池寛や佐佐木茂作らの恩師によって文壇に登場したと自覚しているわりには、『文藝春秋』に対する戦後の関わり方は不可解なほどに薄いものになっている。したがって、この時期に関して検証すべき課題は、芥川賞選考との関係と、これに加えて『文

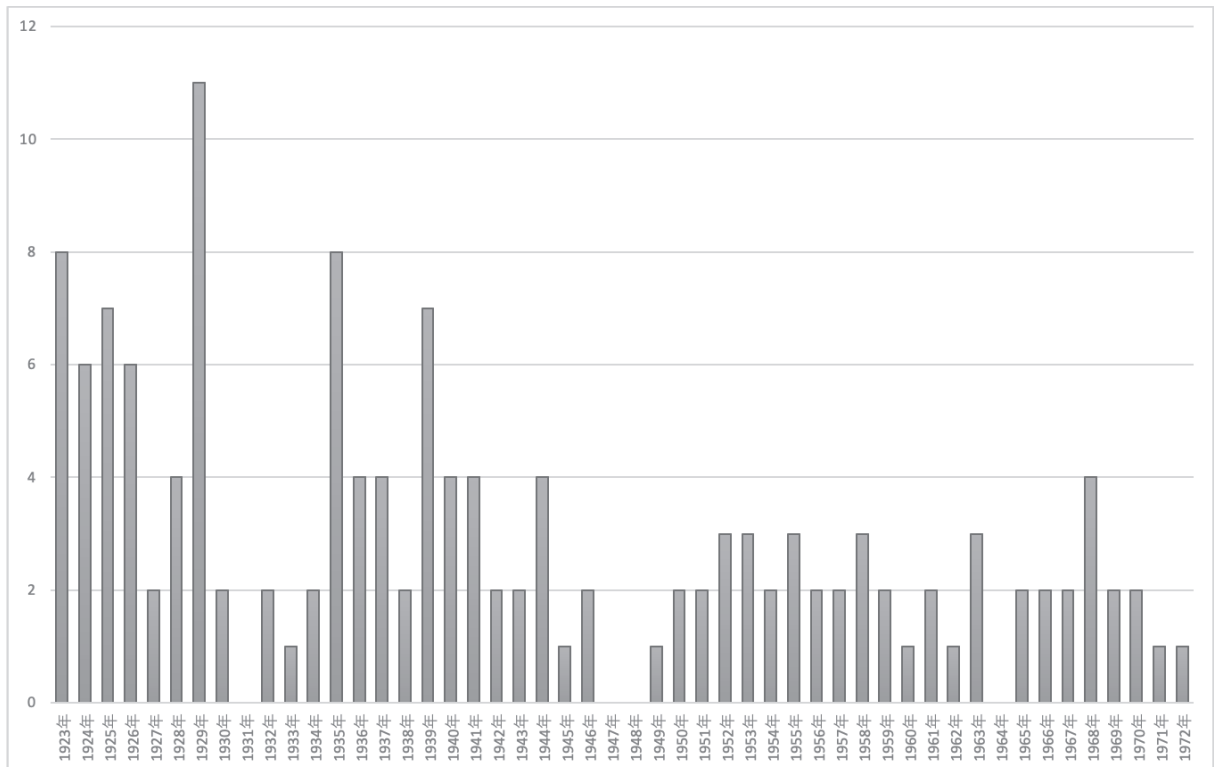


図2 川端康成の『文藝春秋』年別掲載回数

第1期	同人雑誌時代	1923年1月～1926年10月 創刊から、総合雑誌に転換するまで
第2期	総合雑誌時代	1926年11月～1937年7月 総合雑誌化から、日中開戦まで
第3期	時局雑誌時代	1937年8月～1945年3月 日中開戦から、敗戦まで
第4期	戦後雑誌時代	1945年10月～ 戦後復刊以降

図3 本稿における『文藝春秋』の時代区分

政府に保証金を納めて総合雑誌に転じ、先行する『中央公論』『改造』に並ぶ総合雑誌へと成長を遂げていく。一九三七年七月の盧溝橋事件(日中戦争開始)に際しては、開戦を遺憾と表明しつつも、「現地報告」と題した臨時増刊を毎月刊行するなどして、直後から時局に即した出版活動を展開していたことも忘れてはなるまい。一九三八年新年号は三四万八〇〇〇部を発行しており、これが戦前最大の売上規模であったと見られる。一九四四

『文藝春秋』との接点が希薄化した経緯や要因ということになるだろう。以上の三点を考察するため、本稿では、『文藝春秋』の創刊から五〇年間をメディア史的に辿りながら、それぞれの時期における川端の文学との相互的な関係性を確認していく。

まず『文藝春秋』に関する基本事項を確認しよう。『文藝春秋』は菊池寛により一九二三年一月創刊。「頼まれて物を云ふことに飽いた。自分で考へてゐることを、読者や編集者に気兼ねなしに、自由な心持で云つて見たい」⁴という至極簡潔な「創刊の辞」のもと、「気まぐれに出した雑誌だから、何等の定見もない」「来月にも廃すかも知れない」⁵という程度の気軽さで出発した雑誌であった。しかし、創刊号三千部が売り切れ、その後も右肩上がりに発行部数を伸ばしていった。一九二六年一月には

年四月からは戦時下の出版事業整理により総合雑誌から文芸雑誌へと後退、一九四五年三月を最後に戦時中の発行は途絶える。戦後は一九四五年十月から発行を再開したが、翌一九四六年には用紙不足と戦前出版社の戦犯追及が重なり、菊池は三月に文藝春秋社を解散する。直後、残った社員らが菊池に嘆願し、同月中に佐佐木茂索を社長とする文藝春秋新社を発足、六月に復刊第一号が発行される。発足直後には佐佐木の公職追放(一九四七年十月。翌年六月に社長復帰)、横光利一と菊池寛の相次ぐ急逝など多難に遭ったが、その後は発行部数を急速に拡大し、戦後を代表する総合雑誌の一つとして地位を確立、二〇二三年現在も続く一大雑誌メディアであることは周知の通りである。⁷

これらの『文藝春秋』の推移を、主にその発行形態から見て、図3のとおり四期に大別することができる。第一期は総合雑誌に至るまでの同人雑誌の期間(一九二三年一月～一九二六年一〇月)、第二期は総合雑誌に転じてから日中開戦に至るまでの期間(一九二六年一月～一九三七年七月)、第三期は戦時下において「現地報告」等を通じて時局雑誌としての機能を担った時期(一九三七年八月～一九四五年三月)、第四期は戦後雑誌として復興とともに進捗した時期(一九四五年一〇月～)。戦後の『文藝春秋』に関しては本来もう少し細かい区分が必要ではあるが、川端との関係性の低さを考慮して大きく戦後とまとめることにした。

次節からは、この四期それぞれの状況を確認しながら、川端と『文藝春秋』の接点を見ていくことにしたい。

3、「雑文」から生まれた「掌篇小说」

第一期は、創刊から総合雑誌に転じるまでの、同人誌の形態をとって

いた時期である（一九三三年一月～一九二六年六月）。わずか二八頁で構成された創刊号に見られるように、「三枚より六枚半位を最も歓迎」「如何なる大家の原稿と雖も九枚以上絶対お断り」という枚数の原則を設け、四段組の誌面の一頁分に収まる程度の短い随筆・評論が載せられている点に大きな特徴がある。これらの短文テクストは菊池寛によってしばしば「雑文」と称され、「雑文雑誌」とでも分類すべき雑誌として発行されていた。二八頁という薄さ、定価十銭という破格の廉価設定も、言わばこうした「短さ」を志向する規範の延長と言えるだろう。

川端は、創刊十周年記念号（一九三三年一月）の際に、当時のことを次のように回顧している。

私達「新思潮」同人、佐々木味津三君等の「蜘蛛」同人、そこへ横光利一君、中川與一君等が加はり、それらを編輯同人として、大正十二年一月に創刊された僅か二十八頁の雑文雑誌が、今の「文藝春秋」の前身である。⁹（傍点古矢）

川端も創刊のころの『文藝春秋』を「文芸雑誌」ではなく「雑文雑誌」と呼んでいるのが注目される。この時期には小説や戯曲も掲載されていたが、掲載された号がしばしば「附録号」と銘打たれていたように、創作はあくまで「附録」という位置づけであり¹⁰、主たるコンテンツは随筆・評論の雑文だった。

第一期『文藝春秋』の執筆者らは、随筆にせよ小説にせよ、このような極端な「短さ」を求められることになった。しかし一方で、必ずしもそれを制約とは捉えず、むしろ新しい文学の形式として利用していく作家たちがいた。その嚆矢となったのは、当時フランス遊学から帰国したばかり

りの小説家、岡田三郎である。岡田は、フランスから輸入した新しい短篇小説の形式「コント」の紹介・提唱者として知られているが¹¹、その実践、普及の足掛かりとなったのが『文藝春秋』なのであった。一九二四年二月号に、「二十行小説」と題された岡田の文章が、創作欄でもない箇所に掲載されている。岡田は、極端に短いものを求められる雑誌であったことをむしろコント提唱の好機とし、その実作の場として『文藝春秋』を選んだと考えられる。また、同号には中河與一が「短篇小説論」を載せている。この一篇は目次では著者が（中河與一ではなく）「五六枚生」となっており¹²、『文藝春秋』が求める「五六枚」で書く者による「短篇小説論」とされているところからも、「五六枚」の「短篇小説」が新しい傾向の作品として見出されていることが窺える。中河はここで、「吾々は極めて少ししかの時間しか持てゐない。吾々は直接的で素朴なものを求めている」と言い、「吾々は更らに極端に新しい短篇の誕生を待つてゐる」と述べている¹³。そして中河も岡田の「二十行小説」を受けて、同年七月号に「十行小説」を発表、岡田のコントをさらに極端に短くする実験を試みている¹⁴。この間、億良伸という人物が「掌に書いた小説」を載せている（一九二四年四月号）。川端の「掌の小説」「掌篇小说」という語の由来として知られるこの文章も、岡田・中河らのコント実作の動向と無縁ではないだろう。

太田鈴子（一九八三）は、「当初より『文藝春秋』の編集が、短い文章（随筆・評論・投書・創作）を主とするものであったこと、そして、大正十二年六月頃、岡田三郎がコントというフランスの短編形式の一つをフランスより持ち帰ったこと。この二つは、（中略）お互いの要求をお互いが満足しあえるものであった」¹⁵と述べている。まさに、岡田を中心とするコントの動向が『文藝春秋』の「短さ」の制約のなかで成立したことを、

そして岡田らはその制約をむしろ新しい短篇小説を創設する動力としたという点は重要である。

川端もこのような短篇小説の新傾向に創刊時から敏感であったことが窺える。創刊号の目次には、菊池寛がその才能を早くから認めた横光、川端の名が並んでいる。横光が「時代は放蕩する(階級文学者諸卿へ)」と題した批評文を載せた一方で、川端は「林金花の憂鬱」という物語文を載せている。この作品は「浅草紅団」との関連性を指摘されつつも独立した一編と見做され、『川端康成全集』¹⁶や『川端康成全作品研究事典』¹⁷でも「小説」と分類されている。四段組のレイアウトに計七段強の分量(原稿用紙五枚半程度)であり、岡田や中河よりも先に、川端は創刊号から『文藝春秋』の求める「三枚より六枚半位」の枠内で物語を書いていたのである。

一九二三年四月号に掲載された「精霊祭」は、江戸中期の心学者、布施松翁の道話をまとめた『松翁道話』を典拠とした作品で、ほとんどこれを書き写した内容になっている。しかしながら、すでに指摘があるように¹⁸、後の小説作品にも『松翁道話』の同じ箇所が引用されていることから、川端が創作の一断片として構想していたことが窺える。少なくとも、「精霊祭」は後の小説に繋がる断章として成立しているであり、この作品も『文藝春秋』の制約のなかで試みられた創作行為と捉えることができる。

『文藝春秋』に初めて創作欄が付された一九二三年五月号には、横光の出世作となった「蠅」とともに、川端の「会葬の名人」が掲載される。創作欄は附録という位置付けであることから、「三枚より六枚半位」という枚数規定は外され、この作品も全体としては一六枚程度の分量になっている。

「会葬の名人」は「一」「二」「三」の四章で構成されている。「二」が二回あるのは誤植と推測されるが、誌面上は明確に四パートに区切られている(本稿では便宜上、二回ある「二」章を区別するため、先を「二(前)」、後を「二(後)」と表記する)。この作品は単行本『伊豆の踊子』(金星堂、一九二七年三月)に「葬式の名人」と改題されて収録されるが、その際、「一」と「二(前)」の章が結合されて三章構成に改められている¹⁹。したがって三章構成の予定だった原稿が何らかの手違いで余計に章分けされてしまったことも考えられるが、ここでは別の可能性も加えてみたい。すなわち、当初は「一」「二(前)」「三」という三章構成だった作品に、別のテキスト(「二(後)」の部分)が接合されたという解釈である。「一」「二(前)」「三」はいずれも「二十二歳の夏休み」に三度会葬したという体験を語る叙述であり、この内容が表題の由来になっている。一方、「二(後)」は父母および祖父母の葬式を回想する叙述であり、度々比較されるように別稿「骨拾ひ」に通じる内容になっている。前者は縁の遠い死者を次々に弔うほど葬式の習慣を体得した自己が事後的に語られるのに対し、後者は近親者の死をめぐる自己の「生きた感情」が表出しており、特に祖父の臨終前後は事細かに描かれるとともに、祖父の苦しむ姿を正視できずに逃げたという「耻」や祖父と死別した孤児としての感情が切々と語られていく。後者は、その経験が自己を会葬の名人たらしめるプロセスであったというように前者と関連づけようとするが、叙述の性格の違いは隠しきれないほどに際立っている。

興味深いことに、「一」「二(前)」「三」と「二(後)」を分けると、それぞれ八枚程度の分量になる。両者は、『文藝春秋』の枚数規定のなかで生成された別個のテキストとも見られる可能性が拓けてくる。その可能性は川端の創作が『文藝春秋』から始まった意義を考えるうえで示唆的であり、

時系列や叙述の性格の異なる断章的なテキストを接合していく後の創作技法にも通じるものが「会葬の名人」に見られるのではないか。初出テキストの「一」「二」「三」という四章構成は、単行本初収の際には消されてしまった、「雑文」の枠組みのなかで創作された痕跡のように思われてならない。

次に川端は、『文藝春秋』一九二三年一月号の創作欄に「日向」を発表する。「日向」は『感情装飾』（金星堂、一九二六年六月）に収録されることになる、一連の「掌の小説」²⁰に数えられる作品の一つである。後に『掌の小説』として編纂される「掌の小説」群のうち、もつとも古くに発表されたものは「男と女と荷車」（一九二三年四月）であるが、これは『文章倶楽部』に掲載されたものであるため、原稿用紙二枚ほどの分量でまとめられている。「日向」は発表順ではこれに次ぐ二番目になるが、最初に『文藝春秋』の「短さ」の制約を受けてつくられた「掌の小説」は「日向」であり（原稿用紙四枚半程度）、その後、『文藝春秋』や『文藝時代』に掲載された「掌の小説」がほぼ『文藝春秋』の枚数規定の範囲内であることから、むしろ「日向」のほうが「掌の小説」の構想を方向づけている。

川端はさらに、一九二四年に創刊された『文藝時代』の一二月号に、「掌の小説」をセットにして掲載するという試みをする。「短篇集」と題して七篇の「掌の小説」が一挙掲載されており（「髪」「金糸雀」「港」「写真」「白い花」「敵」「月」）、川端は自分たちが主催する新文芸雑誌に載せる自身の第一作に「掌の小説」を選んだのである。この「掌の小説」をまとめて掲載するという方法は再び『文藝時代』一九二五年一月で実験され（第二「短篇集」）、「海」「二十年」「硝子」「お信地蔵」「滑り岩」所収）、その後、『文藝春秋』に逆輸入するかたちで「第三短篇集」（『文藝春秋』一九二五年一二月、「有難う」「萬歳」「胡頹子盗人」「玉台」所収）、「第四短篇集」（『文

藝春秋』一九二六年四月、「子の立場」「心中」「龍宮の乙姫」「処女の祈り」「冬近し」所収）、「第五短篇集」（『文藝春秋』一九二七年五月、「馬美人」「百合の花」「赤い喪服」「処女作の祟り」所収）と継続的に発表する。

川端はこの「短篇集」を量産しながら次のように述べていた。

更に極めて短い形式の小説が立派に文学的価値を持って存在し得ることになれば、小説創作の喜びが一般化することも事実である。（中略）従来の短篇小説とは別個の掌篇小説が花やかに流行する時代は近く来るであらう。²¹

当時の川端には「掌篇小説」が新時代の文学形式であるという確信があり、たとえ長いものが書ける創作欄が与えられても「極めて短い」という規定のなかでの実作にこだわり、「短篇集」という新たな掲載形態をも果敢に実践したのである。その端緒が『文藝春秋』の枚数規定であり、また、それを制約ではなく好機とする新進作家の構想力でもあり、両者が双方向的に新たな文学の場を切り拓いていった航跡をここに辿ることができるのである。

4、総合雑誌における「文芸時評」と「選評」

続いて、第二期、および第三・四期を確認し、前者においては「文芸時評」が、後者においては芥川龍之介賞の「選評」が、それぞれ『文藝春秋』との関わりのなかで生成していく過程を確認する。

第二期は『文藝春秋』が総合雑誌に転換して以降の時期である。この時期では、上述したように、これまで積極的・継続的に掲載してきた川端

の関わり方に変化が見られ、特定の年に集中して作品が掲載されるようになる。具体的には、「文芸時評」が『文藝春秋』誌上に連載されるという点が注目されるのである。なお、この時期には、「雪国」の第一章にあたる「夕景色の鏡」（一九三五年一月）や第六章にあたる「火の枕」（一九三六年一〇月）など、創作のほうでも長篇小説の断片的・横断的連作など注目すべき創作活動も見られるが、これについては『文藝春秋』に限らず川端の創作全般の問題となるため別稿にて検討する。

一九二六年九月、『文藝春秋』は一変する。図4に示す通り、これまで目次を載せるスタイルであった（それがアイデンティティでもあった）表紙が、他の総合雑誌と同じような題字のみのデザインになる。菊池寛は当該号で以下のような「編輯改革の弁」を述べている。

御覧の通、本月号から本誌の編輯を変へて見ることにした。（中略）

今後の本誌は、大量生産より来たる力と財力に依つて、出来るだけ読者を饗応しようと思ふ。漫然たる随筆を並べることなくして、編輯者の見識と趣味とに依り、広汎なる智識階級に対する教養趣味娯楽の雑誌たらんと思ふ。²²

これまでの単なる「雑文雑誌」を変えていこうとする方向性が端的に示されている。そして同年十一月号で「今度、保証金を収めた、め、政談時事を論じて、ことになった」²³と報告され、これ以降、『文藝春秋』は政治、経済、社会等の時事にまつわる記事を掲載していくことになる。総合雑誌『文藝春秋』の誕生である。『文藝春秋』が『中央公論』『改造』に並ぶ一大総合雑誌に成長するにつれ、これらの記事の比重が大きくなる

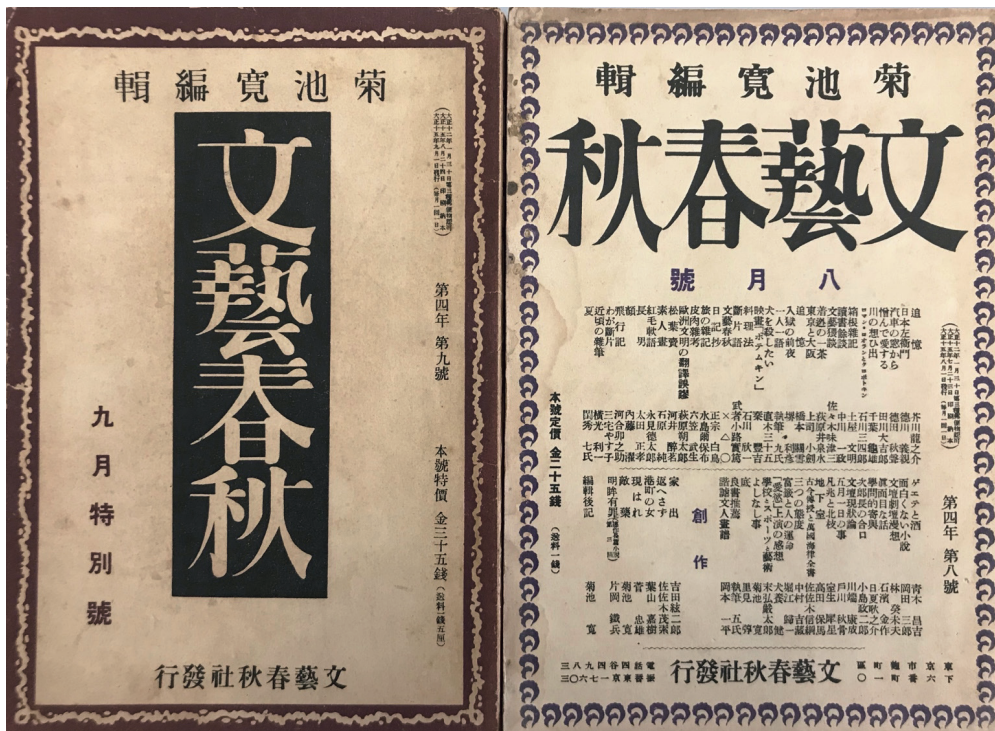


図4 一九二六年八月号(右)と九月号(左)

<p>1926年（大正15・昭和元）年</p> <p>9月 片岡鉄兵「文芸時評」</p> <p>10月 直木三十五「文芸時評」</p> <p>11月 石濱金作「文芸時評」</p> <p>12月 尾崎士郎「文芸時評」</p>	<p>1929（昭和4）年</p> <p>1月 「文芸時評」 （内訳）横光利一「マルキシズム文学の展開」 <u>川端康成「昭和三年と四年」</u></p> <p>2月 <u>川端康成「文芸時評」</u></p> <p>3月 なし</p> <p>4月 <u>川端康成「文芸時評」</u></p> <p>5月 <u>川端康成「文芸時評」</u></p> <p>6月 なし</p> <p>7月 <u>川端康成「文芸時評」</u></p> <p>8月 <u>川端康成「文芸時評」</u></p> <p>9月 <u>川端康成「文芸時評」</u></p> <p>10月 <u>川端康成「文芸時評」</u></p> <p>11月 なし</p> <p>12月 なし</p>
<p>1927（昭和2）年</p> <p>1月 なし</p> <p>2月 久米正雄「文芸時評」</p> <p>3月 久米正雄「文芸時評」</p> <p>4月 なし</p> <p>5月 なし</p> <p>6月 なし</p> <p>7月 廣津和郎「文芸時評」</p> <p>8月 なし</p> <p>9月 なし</p> <p>10月 千葉亀雄「文芸時評」</p> <p>11月 なし</p> <p>12月 なし</p>	<p>1930（昭和5）年</p> <p>1月 谷川徹三「文芸時評」</p> <p>2月 谷川徹三「文芸時評」</p> <p>3月 谷川徹三「文芸時評」</p> <p>4月 小林秀雄「アシルと亀の子（文芸時評）」</p> <p>5月 小林秀雄「アシルと亀の子（文芸時評）」</p> <p>6月 小林秀雄「アシルと亀の子（文芸時評）」</p> <p>7月 小林秀雄「アシルと亀の子（文芸時評）」</p> <p>8月 小林秀雄「アシルと亀の子（文芸時評）」</p> <p>9月 小林秀雄「文芸時評」</p> <p>10月 小林秀雄「文学と風潮（文芸時評）」</p> <p>11月 小林秀雄「横光利一（文芸時評）」</p> <p>12月 小林秀雄「物質への情熱（文芸時評）」</p>
<p>1928（昭和3）年</p> <p>1月 「年頭の文壇時評」 （内訳）<u>川端康成「片岡・横光等の立場」</u> 林房雄「文学の新段階」 勝本清一郎「里見弴氏の「善魔」」 青野季吉「新神秘主義・新情緒派等」 中野重治「断片的予想」</p> <p>2月 なし</p> <p>3月 「文壇時評」 （内訳）尾崎士郎「「芸術の貧困」と「貧困の芸術」」 蔵原惟人「左翼文芸家の総聯合へ」 横光利一「形式物と実感物」 小牧近江「プロレタリア文学運動の反帝国主義性」</p> <p>4月 「文壇時評」 （内訳）萩原朔太郎「室生犀星君の飛躍」 大谷壮一「普選の文壇的収穫」 千葉亀雄「倦怠したのは誰か」 小堀甚二「時評」</p> <p>5月 「文壇時評」 （内訳）山田清三郎「芸術家と五月祭」 鈴木彦次郎「一視点から」 片岡鐵兵「左傾について」</p> <p>6月 「文壇時評」 （内訳）山本修二「歌舞伎二題」 戸川貞雄「旧時代的な、然り」 青野季吉「時評いくつか」 岡田三郎「小説と映画」</p> <p>7月 武者小路実篤「文芸時評その他」</p> <p>8月 室生犀星「文芸時評」</p> <p>9月 室生犀星「文芸時評」</p> <p>10月 室生犀星「文芸時評」</p> <p>11月 横光利一「文芸時評」</p> <p>12月 横光利一「文芸時評」</p>	<p>1931（昭和6）年</p> <p>1月 小林秀雄「マルクスの悟達（文芸時評）」</p> <p>2月 小林秀雄「文芸時評」</p> <p>3月 小林秀雄「心理小説（文芸時評）」</p> <p>4月 正宗白鳥「文芸時評」</p> <p>5月 正宗白鳥「文芸時評」</p> <p>6月 正宗白鳥「文芸時評」</p> <p>7月 正宗白鳥「文芸時評」</p> <p>8月 正宗白鳥「文芸時評」</p> <p>9月 正宗白鳥「文芸時評」</p> <p>10月 正宗白鳥「文芸時評」</p> <p>11月 正宗白鳥「小説讚美（文芸時評）」</p> <p>12月 正宗白鳥「作家志望者へ（文芸時評）」</p>
	<p>1932（昭和7）年</p> <p>1月 中戸川吉二「文芸時評」</p> <p>2月 中戸川吉二「俗悪なる風潮への忿懣（文芸時評）」</p> <p>3月 中戸川吉二「自叙伝小説に就いて（文芸時評）」</p> <p>4月 中戸川吉二「谷崎潤一郎氏に就いて（文芸時評）」</p> <p>5月 中戸川吉二「出放題（文芸時評）」</p> <p>6月 中戸川吉二「九九九会の人々（文芸時評）」</p> <p>7月 河上徹太郎「文壇隆盛の辯（文芸時評）」</p> <p>8月 河上徹太郎「純粹文学の辯（文芸時評）」</p>

図5 『文藝春秋』掲載の文芸時評

9月 河上徹太郎「事実と小説について（文芸時評）」	6月 林房雄「文芸時評」
10月 河上徹太郎「理智と小説について（文芸時評）」	7月 室生犀星「文芸時評」
11月 深田久弥「批評の公平さについて（文芸時評）」	8月 室生犀星「文芸時評」
12月 深田久弥「谷崎潤一郎氏の文章（文芸時評）」	9月 室生犀星「文芸時評」
1933（昭和8）年	
1月 里見淳「作家から作家へ（文芸時評）」	10月 森山啓「ヒューマニズム論議（文芸時評）」
2月 里見淳「先月に引きかへて（文芸時評）」	11月 中村光夫「癩者の復活（文芸時評）」
3月 里見淳「老自戒（文芸時評）」	12月 伊藤整「作家は何を為し得るか（文芸時評）」
4月 杉山平助「リベラリズム台頭（文芸時評）」	
5月 小林秀雄「故郷を失った文学（文芸時評）」	1937（昭和12）年
6月 唐木順三「批評の倫理（文芸時評）」	1月 なし
7月 唐木順三「作家的情熱（文芸時評）」	2月 中條百合子「ジイドとブラウダの批評（文芸時評）」
8月 唐木順三「不安の文学の問題（文芸時評）」	3月 中條百合子「文学に於ける日本的なるもの（文芸時評）」
9月 唐木順三「批評無能の声（文芸時評）」	4月 中條百合子「ヒューマニズムへの道（文芸時評）」
10月 廣津和郎「作家・生活・社会（文芸時評）」	5月 谷川徹三「文学と民衆並びに国民文学の問題（文芸時評）」
11月 廣津和郎「無道徳の芸術境（文芸時評）」	6月 谷川徹三「政治の文学支配について（文芸時評）」
12月 廣津和郎「純文学の為に（文芸時評）」	7月 谷川徹三「国語の諸問題（文芸時評）」
	8月 村山知義「小説の演劇化映画化（文芸時評）」
	9月 村山知義「八月の文芸など（文芸時評）」
	10月 河上徹太郎「戦争と文学（文芸時評）」
	11月 中野重治「ルポルタージュについて（文芸時評）」
	12月 萩原朔太郎「日本語の不自由さ（文芸時評）」
1934（昭和9）年	1938（昭和13）年
1月 小林秀雄「文学界の混乱（文芸時評）」	1月 なし
2月 小林秀雄「新年号創作読後感（文芸時評）」	2月 正宗白鳥「文芸時評」
3月 小林秀雄「文芸時評」	3月 武者小路実篤「文芸時評」
4月 小林秀雄「文芸時評」	4月 武者小路実篤「文芸時評」
5月 なし	5月 武者小路実篤「文芸時評」
6月 小林秀雄「文芸時評」	6月 武者小路実篤「文芸時評」
7月 上司小剣「文芸時評」	7月 阿部知二「文学への信念（文芸時評）」
8月 上司小剣「文芸時評」	8月 阿部知二「文学への読者（文芸時評）」
9月 上司小剣「文芸時評」	9月 阿部知二「時局と文学（文芸時評）」
10月 上司小剣「文芸時評」	10月 岡崎義恵「現代文芸の解剖（文芸時評）」
11月 河上徹太郎「現代芸術の氾濫（文芸時評）」	11月 武田麟太郎「小説精神の探究（文芸時評）」
12月 河上徹太郎「文学に憑かれた人々（文芸時評）」	12月 武田麟太郎「小説「土と兵隊」（文芸時評）」
1935（昭和10）年	1939（昭和14）年
1月 佐藤春夫「文学ザックバラン（文芸時評）」	1月 <u>川端康成「今日の小説（文芸時評）」</u>
2月 佐藤春夫「文学ザックバラン（文芸時評）」	2月 <u>川端康成「文学の嘘について（文芸時評）」</u>
3月 佐藤春夫「文芸ザックバラン（文芸時評）」	3月 なし
4月 佐藤春夫「文芸ザックバラン（文芸時評）」	4月 <u>川端康成「秋聲氏の「仮装人物」論（文芸時評）」</u>
5月 佐藤春夫「文学ザックバラン（文芸時評）」	5月 <u>川端康成「小説と批評（文芸時評）」</u>
6月 <u>川端康成「文芸時評」</u>	6月 <u>川端康成「作家に就て（文芸時評）」</u>
7月 <u>川端康成「文芸時評」</u>	7月 片岡鐵兵「戦争と人間発見（文芸時評）」
8月 <u>川端康成「文芸時評」</u>	8月 片岡鐵兵「構成への意力（文芸時評）」
9月 なし	9月 片岡鐵兵「呪はれた才能（文芸時評）」
10月 <u>川端康成「文芸時評」</u>	10月 小林秀雄「言葉について（文芸時評）」
11月 <u>川端康成「文芸時評」</u>	11月 小林秀雄「学者と官僚（文芸時評）」
12月 <u>川端康成「文芸時評」</u>	12月 小林秀雄「イデオロギイの問題（文芸時評）」
1936（昭和11）年	1940（昭和15）年
1月 豊島與志雄「文芸時評」	1月 なし
2月 豊島與志雄「文芸時評」	2月 林房雄「日本歴史の勉強に就て（文芸時評）」
3月 豊島與志雄「文芸時評」	
4月 林房雄「文芸時評」	
5月 林房雄「文芸時評」	

図5 『文藝春秋』掲載の文芸時評

3月 林房雄「帰還作家の問題（文芸時評）」	9月 高見順「羞恥なき文学（文芸時評）」
4月 林房雄「東洋の作家たち（文芸時評）」	10月 高見順「心情の論理（文芸時評）」
5月 林房雄「現代文学の衰弱（文芸時評）」	11月 高見順「日本文学者の会の成立（文芸時評）」
6月 「文芸時評」	12月 高見順「反俗と通俗（文芸時評）」
（内訳）片岡鐵兵「動機の問題」	
三枝博音「私の文学危機感」	
小林秀雄「処世家の理論」	
7月 「文芸時評」	
（内訳）河上徹太郎「現代日本の短篇小説」	
眞舟豊「純粋なもの」	
窪川稲子「作者の表情」	
8月 「文芸時評」	
（内訳）關口次郎「戯曲形式の変遷」	
中山義秀「世界的な神経」	
廣津和郎「感心した作品」	
	1941（昭和16）年
	1月 なし
	2月 小林秀雄「島木健作論（文芸時評）」
	3月 小林秀雄「林房雄について（文芸時評）」
	4月 尾崎士郎「悲願に立つ文学（文芸時評）」
	5月 なし
	6月 なし
	7月 河上徹太郎「文化行政といふこと（文芸時評）」
	8月 河上徹太郎「小説の中の「私」（文芸時評）」
	9月 河上徹太郎「思考の貧困（文芸時評）」

図5 『文藝春秋』掲載の文芸時評

（『文藝春秋七十年史 資料篇』（文藝春秋、一九九四年一二月）所収の『『文藝春秋』総目次』をもとに著者作成）

と、文学者も徐々に政治的な内容、時局に沿った文章を求められるようになる。しかしながら川端の場合、図1（前掲）を改めて確認してみても、その種の文章はまったく見られず、小説、文芸時評、芥川賞選評ばかりが並んでいる。川端の執筆活動は文芸の領域を出ることはなかったと言わざるを得ない。

『文藝春秋』が政治的な記事を扱うようになり、総合雑誌ゆえに執筆者が多様化し、文学者も政治参加を問われるようなメディア状況のなかで、かつて川端が積極的に発表していた『文藝春秋』の「雑文雑誌」的性格は徐々に薄まっていった。結果、文芸の領域に留まろうとする川端の活動の場は『新潮』や『文學界』等の文芸雑誌、また婦人雑誌²⁴が中心になっていくわけだが、総合雑誌に残された大きな仕事として、「文芸時評」と「芥川賞委員」（選考委員）があった。「文芸時評」は第二期から戦時中の第三期まで、「芥川賞委員」は第二期から戦後の第四期まで、それぞれ継続的な活動が見られる。

上述の、誌面を刷新した一九二六年九月号には、一瞥しただけでは見落とされてしまう重要な記事が掲載されている。それは、片岡鐵兵の「文芸時評」である。実は、文芸時評的な内容の記事はこれまでもあったが、『文藝春秋』に「文芸時評」という題辞で作品の月評が載せられるのはこれが最初である。翌一〇月号には直木三十五の「文芸時評」、一月号には石濱金作の「文芸時評」、二月号には尾崎士郎の「文芸時評」というように、立て続けに「文芸時評」が掲載されるようになる。総合雑誌に転身しようとする『文藝春秋』が「時評」の価値を重視し、その足掛かりとして「文芸時評」を連載しはじめたと考えられる。一九二六年九月号以降の「文芸時評」掲載状況をまとめると、図5の通りになる。『文藝春秋』の「文芸時評」は、同時代の主要総合雑誌三誌（『中央公論』『改造』『経済往来』）

と比べると、本数、ページ数、質、すべてにおいて突出したものになっている。²⁵ そのなかでも、川端の「文芸時評」掲載回数は、最も多い小林秀雄（二三回）に次ぐ二〇回である。

これを見ると、一九二七年は総合雑誌となって編輯を模索していたためか不定期な掲載に留まっている。しかし一九二八年以降は、若干の休載は見られるものの、コンスタントに「文芸時評」が連載されており、主要なコンテンツとして本格的に展開されている。特に一九二八年前半は「文壇時評」と題して、三〜四人の作家による時評が立場を問わず並べられており、『文藝春秋』が文芸分野の時評に力を入れようとしていた様子が窺える。この半年間に及ぶ企画の巻頭に選ばれているのが、川端の文芸時評「片岡・横光等の立場」である。

川端の文芸時評家としての出発は、一九二一年一二月の『新潮』に発表した「南部氏の作風」と、翌一九二二年二月に『時事新報』に四回掲載された「今月の創作界」に見るのが通例であろう。²⁶ 実際、この二篇を皮切りに、『新潮』『時事新報』の他、『讀賣新聞』『文藝春秋』『都新聞』『文藝時代』『萬朝報』など、複数の媒体に文芸時評的な批評活動を拡げていっている。²⁷ 一方で、この「片岡・横光等の立場」も川端の文芸時評家としてのメルクマールとなっている点を忘れてはならない。まさにこの時、川端の文芸時評を筆頭にすかたちで『文藝春秋』が総合雑誌において原則毎月「文芸時評」を掲載するようになり、「文芸時評」はジャーナリスティックな制度として再編されたのである。昭和文学は社会的・政治的な諸問題と無縁ではいられず、それらと即時的に関わるようになっていくが、そのような文学状況を即時的かつ継続的に実況し、読者と共有するネットワークを構築していく新たな（昭和批評）が、ここに幕開けしたと言えるだろう。このような意味で、一九二八年は「文芸時評」の系譜上の分水

嶺と見るべきである。

一九二八年の後半にも目を向けよう。上述の通り、同年前半は執筆者が複数で、かつ毎月変わっており、論の多彩さが売りになっていた。一方、八月から一〇月にかけては室生犀星が三号連続で連載、続く一・二二月は横光利一が連載し、同一作家による連載が試みられている。その横光から嚮を繋がるかたちで、翌一九二九年一月には、横光・川端が連名で「文芸時評」を担当し、その後の二月から一〇月まで川端の「文芸時評」が長期連載される。『文藝春秋』において同一作家による「文芸時評」が半年間以上にわたって連載されるのも、川端が初めてなのである。なお、小林秀雄が「様々なる意匠」で『改造』懸賞評論の二等となり文芸時評家として誌面に登場したのも一九二九年四月のことで、小林は川端の「文芸時評」連載を引き継ぐように翌一九三〇年の四月から一九三一年三月まで一年間にわたり「文芸時評」連載を担当することになる。このように辿ると、一九二八年から一九二九年にかけての二年間が、いかに「文芸時評」の転換点であったか、そしてその舞台が総合雑誌であったこと、その中心となったのが川端であったことが見えてくる。実際、川端はこの時期を「来るべき文壇の移り目」と捉え、「作品（批）評」の重要性を論じている。

作品批評を盛んにすること。この分り切つたことを何故云はなければならぬとならば、ここ一二年の私自身が、作品を離れて文学論を、或ひはまた作品を離れた文学論を、多く読みつあつた者の一人だからだ。敢て、者の一人と云つても差支へあるまい程に、それは文壇の大勢だつたのだ。もとより、大きい移り目である今日、それは理の当然であらうが、さて作品を纏めて読んでみると、矢張

り文壇を知るには作品を読むのが近道であり、文壇を進めるには作品評が本道であることが、今更らしく感ぜられるのだ。²⁸

このとき、「文芸時評」は、月毎に執筆者が変わるような単発的なもの、編集側に要請されて書かれるものではなくなっている。一人の時評家が、同一誌上に継続的に発表することでジャーナリスティックな制度となり、連続性をもった「長篇」としての批評が形成されたのである。その舞台が新総合雑誌『文藝春秋』であったこと、そのなかで川端が「作品(批評)」の価値を創造し、小林秀雄につながる昭和批評の道を拓いたことが、メディア史のなかで改めて注目すべき事項として浮かびあがってくる。

川端はその後も、一九三五年、一九三九年にそれぞれ約半年間「文芸時評」を連載している。前者は純粹小説論や文芸懇話会等々の「文芸復興」の問題圏のなかで、後者は戦時下の文学の問題圏のなかで、同時代の言説に呼応しながらも「文芸時評」自体もその言説を構成するものとなっていたのである。

しかしながら、これ以降は川端が「文芸時評」を担当しなくなり²⁹、小説掲載すらも徐々に消極的になっていく。とりわけ戦後は、一九四六年からの二七年間で小説掲載はわずか七回に留まる³⁰。その結果、図1(前掲)の通り、『文藝春秋』との接点は「芥川賞選評」ばかりが羅列されてしまふことになる。

芥川賞選評も、選考対象の時期ごとに新人作品を評価するという意味で、「文芸時評」の延長線上にあると言える。川端は「文芸時評」のなかで「私は常に批評家によつて軽んじられて通して来た作家の味方である」³¹と述べており、芥川賞は川端にとってまさにそのような新人・無名の作家を評価する手段となり得たのである。

芥川賞は、直木三十五賞とともに、一九三五年一月に制定が公表された文学賞である。「広く各新聞雑誌(同人雑誌を含む)に発表されたる無名もしくは新進作家の創作中最も優秀なるもの」に進呈するとされ、それを選考する「芥川賞委員」には、菊池寛、久米正雄、山本有三、佐藤春夫、谷崎潤一郎、室生犀星、小島政二郎、佐佐木茂作、瀧井孝作、横光利一、川端康成が挙げられることになった³²。『文藝春秋』誌上に始まり、現在も最も権威のある文学賞の一つであり続けている芥川賞の起源にも、やはり川端の名が刻まれている。そしてまさにその第一回の選評にて、川端が「なるほど『道化の華』の方が作者の生活や文学観を一杯に盛つてゐるが、私見によれば、作者目下の生活に厭な雲ありて、才能の素直に発せざる憾みあつた」と述べたことが、受賞を逃した太宰治とのトラブルに発展したことはよく知られている。しかし、このような応酬があつたにせよ、川端が太宰を一貫して評価していたことも明らかであり、この頃に川端が親交していた北条民雄なども含め³³、川端が「文芸時評」で培った新人・無名の作家の味方をしようとする批評精神が、この芥川賞選評にも接続されていることを如実に確認できるだろう。

ところが、この芥川賞選評も、後になるにつれて川端の積極性が薄れていくと考えられる。たとえば、第二八回芥川賞選評では「私は近年他人の小説を批判する気持が減退するにつれて、その能力も減退して来たらしく、(中略)最早委員には適任でないのだらう」³⁴という弱気な記述が見られ、第三四回の石原慎太郎が受賞した際には強く推奨しつつも「なんでも勝手にすれればいいが、なにかは出来る人にはちがひないだらう」³⁵という曖昧な説明になっている。第三九回の大江健三郎を推奨したことなど、新人作家の評価にはやはり高い手腕を保ち続けてはいたが、全体として、「文芸時評」の精神は徐々に後退していったように思わ

れる。

以上のように、川端の「文芸時評」「選評」が結果的には量においても批評の精度においても退潮していったにせよ、『文藝春秋』の成長とともに相互的に展開していったプロセスを確認することができた。川端の「文芸時評」は、主に、同時代の文学動向の把握や、川端の作家論的な分析のなかで扱われてきたように思われるが^{3,6}、総合雑誌のメディア史という枠組みにおいて川端の文学的展開を捉え直すことも重要であろう。

5、おわりに

以上のように、川端と『文藝春秋』はその文壇登場と創刊を共にした関係を形成したのであり、その五十年の経歴のなかで、『文藝春秋』が現在に至るまでの一大総合雑誌となっていることは周知の通りだが、川端自身もこの新興雑誌との関係のなかで文学の新たな形式を模索し構想していったことが確認できただろう。

「雑文雑誌」であった第一期では、枚数規定に見られる「短さ」の制約をあえて文学の新形式に発展させ、「掌篇小説」の流行を提起するまでになる。総合雑誌に転身した第二期からは、『文藝春秋』が力を入れた「時評」コンテンツの一つである「文芸時評」の担当者の筆頭となり、むしろ川端がその後の制度としての「文芸時評」の礎を築いていったと言ってよい。一方で、「文芸時評」は第三期までにとどまることになった。第二期から始まるもう一つの『文藝春秋』由来の文学制度として芥川賞の選考があり、川端は生涯にわたってその委員を担当し、芥川賞の継続と文学賞を通じた新人・無名の作家の評価という、「文芸時評」の延長線上の制度も新たに構築していった。しかし、両者の関係はこれ以上は発展しなかつ

たと言える。掲載される小説も疎になり、菊池寛・佐佐木茂索らとの創刊前後の回顧するばかりの二、三の随筆を除けば、芥川賞選評ばかりが並ぶ寂しい関係性であったことが露呈してしまう。しかし、新進作家時代を中心に、川端と『文藝春秋』が共に一九二〇年代から三〇年代にかけての文学動向の画期を描いたことは疑いようのないことである。

注

1 本稿は、雑誌『文藝春秋』と川端との関係性を検証することとし、文藝春秋発行の他誌や他刊行物、講演会などのイベントや晩年のエピソードなどのような文藝春秋社との関係性については論及しない。

2 川端康成「夢 幻の如くなり」、『文藝春秋』、一九七二年二月、二三八頁

3 同、二四二頁

4 菊池寛「創刊の辞」、『文藝春秋』、一九二三年一月、一頁

5 菊池寛(題名なし)、『文藝春秋』、一九二三年一月、二八頁

6 永嶺重敏「モダン都市の読書空間」(日本エディタースクール出版部、二〇〇一年三月)の「第三章 初期『文藝春秋』の読者層」に、『文藝春秋』の戦前発行部数の推移をまとめた表が載せられている(九八―九九頁)。

7 詳細は『文藝春秋三十五年史稿』(文藝春秋新社、一九五九年四月)、『文藝春秋六十年の歩み』(文藝春秋、一九八二年一月)、『文藝春秋七十年史』(文藝春秋、一九九一年二月)、『文藝春秋の八十五年』(文藝春秋、二〇〇六年二月)等を参照。

8 菊池寛(題名なし)、『文藝春秋』、一九二三年一月、二八頁

9 川端康成「菊池寛氏の家と文藝春秋社の十年間」、『文藝春秋』

一九三二年一月、一九六頁

¹⁰ たとえば一九二三年五月号は「特別号」、一九二三年七月号や一九二四年一月号は「創作附録号」、一九二四年三月号や一月号は「一幕物附録号」、一九二四年六月号以降の小説掲載号は「特別附録号」となっており、創作蘭は「特別」な「附録」とされていた。一九二三年三月号の「編輯後記」には「創作をのせてくれと云ふ希望が多い。が、創作をのせては、やつぱり普通の文芸雑誌になつてしまふ」(五六頁)と記しており、菊池は当初は創作を掲載すること、創作が中心となることに懸念を抱いていたようである。(なお、「特別」「附録」とせずに創作欄が原則載せられるようになるは一九二五年六月号からである)

¹¹ 太田鈴子「岡田三郎のコント論——短篇小説との関係を中心に——」(『学苑』、一九八四年一月)を参照。

¹² 目次では著者は「五六枚生」となっているが、本文では「中河與一」となっている。

¹³ 中河與一「短篇小説論」、『文藝春秋』、一九二四年二月、二九頁

¹⁴ 中河與一のコントについては、土田俊和「新感覚派時代の中河與一とコント——「氷る舞踏場」を中心に——」(『横光利一研究』、二〇一五年三月)を参照。

¹⁵ 太田鈴子「億良伸「掌」に書いた小説」について——コント・ブーム開幕期における意味——、『学苑』、一九八三年二月、四七頁

¹⁶ 『川端康成全集 第二十一巻』、新潮社、一九八〇年六月、五三〇—五八頁

¹⁷ 『川端康成全作品研究事典』、勉誠出版、一九九八年六月、三八三頁

¹⁸ 深澤晴美「精霊祭」、『川端康成全作品研究事典』(前掲)、一九三頁

¹⁹ 福田淳子「川端康成「葬式の名人」論」(川端文学研究会編『川端文学への視界 年報'94』、教育出版センター、五〇—二二頁)は、この作品の三章構成の意味を考察している。

²⁰ 川端の掌篇小説は、『掌の小説』に収められたものと、そうでないものがある。本稿では前者を「掌の小説」と表記して区別する。

²¹ 川端康成「掌篇小説の流行」、『文藝春秋』、一九二六年一月、一五〇—一六頁

²² 菊池寛「よしなし事」、『文藝春秋』、一九二六年九月、六九頁

²³ 菊池寛「編輯後記」、『文藝春秋』、一九二六年一月、二一六頁

²⁴ 川端の作品に婦人雑誌に掲載されたものが少なくない点は、詳細な説明を要するため、別稿にて報告する。

²⁵ 松本和也「昭和10年代における文芸時評(Ⅰ)——総合雑誌『中央公論』『改造』『文藝春秋』『日本評論』(『人文学研究所報』、二〇一七年三月)は、昭和一〇年代の「文芸時評」欄を調査し、「総合雑誌の中で、最も多く「文芸時評」が持続的かつ精力的に掲載された媒体だといえる」(二八頁)と述べている。

²⁶ 川嶋至「文芸時評家としての川端康成——新人発掘者としての川端——」(『國文学 解釈と教材の研究』、一九六六年八月)は、「文壇にはむしろ批評家として早く登場したことなる」(三六頁)と指摘している。

²⁷ 岩田光子「川端康成——後姿への独白——」(ゆまに書房、一九九二年九月)の「I 川端康成の文芸評論」(三〇—一三〇頁)が、「南部氏の作風」に始まる川端の文芸評論活動全般を検討している。

²⁸ 川端康成「新春創作界の外観」、『文藝春秋』、一九二九年二月、三三三頁

²⁹ 小谷野敦『川端康成 双面の人』（中央公論新社、二〇一三年五月）は、川端が文芸時評では「実に激しくかつ鋭く、作品を批評し、論争的な議論を立てている」が、「それをやめて以後、芥川賞の選評以外では、まったくと言っていいほど批判的言辞を用いなくなるのが目立つ」と述べている。

³⁰ 『文藝春秋』本誌とは別に『別冊文藝春秋』が刊行されており、川端は戦後一〇年ほどは小説を寄稿しているが、これらは短編小説を集中掲載した文芸雑誌であり、総合雑誌である本誌との関係性とは切り離して考えるべきである。

³¹ 川端康成「文芸時評」、『文藝春秋』一九三五年七月、一四〇頁

³² 「芥川・直木賞宣言」、『文藝春秋』一九三五年一月、一一〇～一一一頁

³³ 十重田裕一『川端康成 孤独を駆ける』（岩波書店、二〇二三年三月）の「10 新人発見と育成の名人」を参照。

³⁴ 川端康成「選後評 平凡な読者として」、『文藝春秋』、一九五三年三月、二四九頁

³⁵ 川端康成「芥川賞選評 多少の「ためらひ」、『文藝春秋』、一九五六年三月、二八七頁

³⁶ 羽鳥徹哉「解説 小説に入れあげる」（川端康成『文芸時評』、講談社文芸文庫、二〇〇三年九月）は、川端の文芸時評から「第一に、文学史の流れを現場の具体に即して感じ取ることが出来る、第二に、川端個人の人間性、文学観、批評論、女性観、伝記的事実等々を読み取ることが出来る。そして第三に、それらを通して、われわれの今を考える上での、多くの示唆を読み取ることが出来る」（四〇三頁）と述べている。

※本稿は、川端康成文学館第36回文学講座（二〇二三年三月一九日）における講話「川端康成と『文藝春秋』——その戦中・戦後——」に基づく。